

ソ連における佛教と佛教徒

本稿は、ソ連のノーボスチ通信社記者であるエルモシキン Nikolai Yermoshkin氏によつて著わされた「Buddism and Buddhists in the USSR」の抄譯である。エルモシキン氏はモスクワ國際大學の出身であり、ノーボスチ通信社入社後、インド特派員として活躍中に南アジア文化や佛教文化に關心を持つようになった。そして、ソ連における佛教の現状および佛教研究の歴史などについて、新聞記者的なすぐれた感覚による探究心から調査するようになった。

この論文はその成果の一つである。この種のレポートはソ連でも唯一のものであろうし、わが國でもあまり報告されていないので、あえてここに紹介することにした。本學報前號や國際宗教ニュース（一九六八・六号）の拙稿などと併せ讀まれば幸いである。なお、この譯出は、文學部佛教學科三回生市野善照君の手になるものである。（水谷幸正）

佛教傳播の小史

いる中央アジアに擴まつた時であつた。

宗教的、あるいは哲學的體系としての佛教は A. D. 一世紀に、現在はソヴィエト連邦の統轄下にある領域に擴まり始めた。それは佛教が、「大きな絹の道」の通つて

佛教はまず最初、古代 Khorazm に浸透した。そして次第に大きな中心的な佛教圈が、カスピ海と太平洋の間の廣大な地域に成長した。これらの佛教圈は當時のアジア文化圈において、非常な注目を浴びていた。

中世初期には、佛教僧院が中央アジアの大都市のほとんどに建てられた。古い記録によれば、A. D. 七世紀の中頃にサマルカンドで佛教寺院が復興されたと記している。またクツチャとコータンの佛教文化センターは非常に有名である。學者達はインドでは發見することのできない貴重なインドの寫本を探すため、コータンを訪れたものである。

最近まで中央アジアの佛教に關する唯一の手懸りは、古代の旅行者によって書かれた簡単な手記と、多數の坐禪している佛陀の繪だけであつた。

ところがソヴィエト時代になってからは、系統的考古學調査の結果、古代寺院、學校、フレスコの彫刻や破片など佛教文化の遺跡が數多く發見された。ガンダーラ様式後期の石佛像の破片は、テルメズの町の近くで發見された。數年後同じ遺跡で、青銅の獅子のある佛教寺院の舊跡が發見された。

北部 Kirghizia にある Chu 川の緑の谷は、古代佛教文化の遺跡が特に豊富であるとされている。Dzhul の古代都市の近郊で學者達は、佛教遁世者が住んでいた僧院

をすっかり發見した。そこには數多くの庵室があり、小さな鐘樓塔のところでは、僧侶が描いたとおもわれる宗教畫の彫像と彫刻の破片が發見された。

中央アジアにおける佛教の流傳は、人びとの精神生活に影響を及ぼしたのみならず、その藝術にも生き生きと反映している。人びとの中には多勢の信者がいた。そして、佛教徒の指導者達と一緒に寺院や僧院を建てた職人、古代インド様式の佛陀の像を作った腕の良い彫刻家達、全佛教世界に知られている有名な石窟寺院の壁を壁畫でおおった畫家達がやつて來た。

トルクメンの Bairam-Ali で發掘が行われている時、考古學者達は佛教徒の舍利壺と裝飾のついた粘土の容器を發見した。その容器の中には、佛陀の小石像、A. D. 五世紀と關係づけられるササン朝時代のペルシア貨幣、そして押しつぶされたシュロの葉の積み重なったものが入っていた。約一五〇〇年もの間その容器の中にあつたシュロの葉は、アジア諸民族研究所のレニングラード支局で保存された。後になってこの發見は極めて貴重なものであることがわかつた。シュロの葉は A. D. 五世紀

の最古の佛教寫本の一つと關係があり、それは熟練した能書家によつてブラフミで書かれている。その寫本は僧侶の生活規則を含む佛教徒の戒律の經典から取られている。

ソヴィエトの考古學者は、現在まで中央アジアにおいて、カロシュティとブラフミで書かれたインド文學の遺本を二〇以上發見している。近年になつてからは、中央アジアにおける佛教中心地がいくつも發見された。Semirechye (Ak-Beshi と Krasnorechensk 地域) 、 Fergana (Kuva) の谷、南、 Tajikistan (Adzhina Tepe) としていくつかの他の場所である。このことは二〇世紀の始めに、佛教がソヴィエト中央アジアの領域に廣く擴がつたことを、證據づけるものである。

七世紀から九世紀にかけて、佛教は次第にイスラム教の壓制の下で、中央アジアから消滅した。中央アジア西部とタリム盆地においては、やや遅れて一〇〜一四世紀にイスラム教への改宗が続いて起つた。

第二回目の佛教は、モンゴル人侵入の後一三〜一四世紀に中央アジア西部とヴォルガの低盆地に現われた。モ

ンゴル人の Khan (汗) の多くは佛教徒であつた。

第三回目の佛教は、一七〜一八世紀にオイラット、即ち西モンゴル民族と伴に現われた。一六二〇年 Hoshut の王子 Baibagas Batar はチベット佛教 (謂ゆる黄帽派) を採用した。

一六二八〜三〇年の時代に、西モンゴル人がヴォルガ河岸へやつて來て、佛教をもたらした。しかしながら Povdnye ステップにおいては、修道院センターは一つも建てられなかつたし、Kalmyk の僧院は單に遊牧民のためのものであつた。佛教の教義は Turania 遊牧民によつて黒海沿岸に傳えられた。

東シベリアとバイカル地方に、佛教はほとんど同時に現われた。そして一七一二年、一五〇人のチベット佛教僧がその地域にやつて來た時、Buryat 遊牧民の間で擴まり始めた。インドの放浪民族 Sadhu は、Buryat のステップを訪れたという説がある。このようなことはモンゴルにおいても起り、Uran-Bator の Gandan の僧院のなかには、遠くインドからの棒と修道院用のカップが残つていた。

Buryatia における Tsongol dazan という最初の僧院は、一七四一年にセレンガ河地域に建てられた。

ヨーロッパの首都における最初の佛教寺院が、一九一四年にペテルスブルグに建てられたということは興味あることである。

以上は現在ソヴィエト連邦に統治されている領土に、佛教が如何に擴まつたかを簡単に述べたものである。現在では宗教的教義としての佛教は、シベリアにのみ存在している。ソヴィエトの佛教徒の宗教生活については、次章で述べたいと思う。

佛教の現況

ソヴィエト國家が共產主義者によって率いられて以來、ソヴィエトには宗教の自由はないという誤まった見解があるが、このことはまったく間違っている。殆どどのソヴィエト人は無神論者であるが、同時にソ連のすべての市民は自らが撰擇する如何なる信仰を告白してもよいし、多くの宗教的信仰が行なわれている。それはソヴ

ィエト連邦共和國という國家が種々の國家によって構成されていることを考えれば、ごく當然のことである。

信者の大部分はロシア正教會に屬し、この教會は禮拜堂を最も多く持つている。その次に多いのはイスラム教である。その他、カトリック、佛教、ルーテル派などもある。

ソヴィエト連邦におけるすべての教會と信仰は、信者や僧職者や集會場の多少に關係なく、國家の下での各宗教間の平等の權利を楽しんでいる。一九一八年早々、ソヴィエト政府は市民の國家的宗教的特性を考慮して、それまでの正教會の優勢を除去した。ソヴィエト連邦共和國憲法はすべての市民に良心と宗教儀禮の履行の自由を保障している。ソヴィエトの法律は、宗教的信仰への迫害を信者の感情に對する侮辱と同様に禁じている。國家はただ一つのことを要求する。即ち、宗教機構は現行法を尊重し、それらに何の迫害もしないということである。

ソヴィエト連邦における佛教は、Chita 州の Aginsk 民族自治管區、Irkutsk 州の Buryat 民族自治管區、

自治共和國の一部の人民、即ち簡単にいえば、東シベリアに住むブリヤート人によって信仰されている。佛教はまた、Tuva や Kalmyk 自治共和國にも擴がっている。佛教寺院はソヴィエトの佛教徒によって建てられたものであり、彼らはモンゴルやチベットの僧侶と似ている。ソヴィエト連邦における佛教寺院はそんなに多くはなく、例えばビルマよりもずっと少ない。このことはソヴィエト連邦における佛教の歴史的理由によるものである。まず最初に佛教は、他の佛教國に比べると非常に遅れて、ほんの二世紀から二世紀半前にブリヤート人の領域に擴がり始めた。インド、ビルマ、ネパール、カンボジア、タイ、セイロンで發見された壯大な遺跡が二五〇〇年以上も前に建立されたものであることと比べると、その歴史が如何に新しいものであるかがわかるであろう。第二にそれは信者の生活様式と非常に關係がある。ソヴィエトの佛教徒の大部分は以前の遊牧民である。ソヴィエトの權力が及んだ期間だけ彼らは定住生活を営むことができた。そして最後に、他の國に比べるとソヴィエト連邦の佛教徒は、驚くべき程少ないという理由であ

る。これらの理由が、佛教遺跡の建立に影響したのは當然である。

しかしそれにもかかわらず、ソヴィエト連邦には二〇〇年以上もの歴史のある佛教寺院や僧院があるのである。

最近私は、世界で最も深い湖であるバイカル湖の畔でシベリアの山岳地方にある Buryatia を訪れた。ある日、私は中部 Ivovga 居留地の佛教僧院を見學することに決めた。私はそこを訪れるようにと、ソヴィエト佛教徒の首長である Zhambal Dorzhi Gomboyev に、佛教徒世界會議の後でモスクワで會見したときに招待されていたのであった。

Ivovga 佛教僧院は、(その地方では佛教寺院として dazan と呼ばれているのであるが)、共和國の首都 Ulan-Ude から約四〇キロ程離れた雪を少しかぶった緑の山々を背景として、美しい物静かな谷間にあった。

黄色い法衣を身につけた僧が我々を僧院の門の所で出向えた。恐らく彼は我々の乗って来た自動車を見ながら見ただであらう。我々が一體何者なのか、何をしに來たのか

尋ねもしないで、彼は丁重に門をぐつと開いた。そこで私は、彼に我々が何故ここへやって来たのかを説明し、私が来たことを *Gomboev* に取り次いでくれるように頼んだ。僧は、新來者はすべて歓迎され、*Bandido-Kh-ambo Lama* (ソ連の佛教徒首長の名稱) に取り次いでもらえるようになっていと答えた。

僧院の配置は約三〇〜三五棟の建物から成っており、中央に二棟の明るい色で塗られた寺院がある。*dasan* における塔の多くは、南アジア、または東南アジアの佛教徒が建てたものと非常によく似ている。

我々は朝早く到着したのだが、*dasan* にはもう大勢の人々がいた。聞いてみると、信者の大部分が、太陰暦に基づいてソヴィエトの佛教徒が祝う新年の祭典に参加するために、数日前からここに來ているということであった。その行事は普通數日間続く。宗教儀式的間に佛陀の經典が讀まれ、彼の徳を稱える頌詩と聖歌が歌われ、説教が行われる。その行事は普通、一日に短い休み時間を何度も入れて、早朝に始まり夜遅くまで続く。*dasan* に滞在したいときには、時々二階建ての大きなホテルに

宿泊することができるし、もしホテルの宿泊設備が一つも利用できなければ、信者達はラマの家に泊ることができる。三〇人の僧が *Ivolga* 僧院の中の寺に住んでおり、それはソ連の佛教徒中央宗務委員會に屬している。大きな建物としては、*Buryat* の佛教學者に廣く利用されている圖書館がある。その圖書館は非常に多くの經典を所有し、また禮拜の對象とさえなっている。またチベット、モンゴル、インド、そして中國からの珍らしい寫本や木版、さらには *Tripitaka* の完成した著作である一〇八卷の *Gandjur* と二二五卷の *Dandjur* を藏している。第五代 *Dalai Lama* 著述の五卷は、佛教徒の「黃帽」派の祖師である *Tsongkhapa* の著書と同様に偉大な價值のあるものである。他の興味ある書籍としては、有名なインドの歴史家であり、哲學者である *Tar-anatha* 著述の多くの本と、チベット、モンゴル、*Buryatia* の佛教僧院の哲學的教育體系の創設者 *Gunchen Zhamyan Shadba* の著書がある。書物はその大部分が、黄色または茶色の絹に木版印刷されていて非常に色彩豊かである。現代の書物もまた貴重なものである。圖

書館にいる僧は、ソ連で發行された佛教あるいは佛教徒に關するすべての文獻を収集している。彼らは *Sarvapaṇi Rādhakrishnan* 博士の「インド哲學」と「ダンマパダ」のロシア語譯を持っている。

私は圖書館を出て、今度は寺院へ行った。Buryat の職人がこの寺院を、一九四五〜四七年の間に建立したのであった。儀式はここでも行われていて、三〇人の僧はすべて、そして *Bandido-Khambo Lama* を兼ねている *Ivolga* 僧院の院長もそれに參加していた。禮拜者の幾人かは一つの寺で祈りがすむと、また別の寺へ行つた。氣候は非常に寒かった。零下四〇度。しかし信者達は、寺から寺へと行く途中でも佛塔の前で帽子をぬいで祈りの文を読んだ。

既に私が述べたように、その日は新年と佛陀の正覺を祝して、大きな儀式が行われていた。私はその朝、僧が讀んでいる祈りの文を私のために翻譯してくれるように頼んだ。ここにそれを記す。『すべての見えるもの、そして見えないもの、この二つは私のすぐ側にあり、また遠く離れている。これらのものに幸あれ。そしてすべ

ての生きとし生けるものに喜びあれ！お互いに傷つけあうことなく、輕蔑することなく、他人に惡魔が來ることを望むことなかれ。恰も母親がその子供を救うために自分の命を犠牲にするが如く、汝はすべての生きとし生けるものを愛せよ。汝が何處にいても、兄弟よ、賢明なる佛陀を想い起し、恐れ、疑うことなかれ。』

その祈りは時々音樂を伴う。それは私が聞いた限りでは、ネパールとチベットの佛教僧院で演奏されるものと非常によく似ている。儀式が行われる廣間は、*佛陀*、*Maidari*、*Tsongkhapa*、そして佛教徒の諸々の守護神の繪画や像で飾られている。『*Sansaren-Khurde*』（生命の輪）の色彩豊かな絹の布が、佛陀の生涯を描いた繪と結びつけられて天井から釣下っている。寺院の外側は木の彫刻で飾られ、佛教徒の傳統色である黄色と茶色に塗られている。

佛教徒の長老が宗教儀式を始め出したので私はそれが終るまで待たねばならなかった。二時丁度に僧は儀式を終えて家に帰った。その光景はまるで繪のようであり、私に同行した寫眞家は特に喜んだ。實にまばゆい程白い

雪を背後に、黄色と茶色の法衣を肩にまとったウマは繪のように美しく見えた。

私はソ連の佛教徒中央宗務委員會の事務所に招待された。Gomboev は我々を微笑をもつて歓迎してくれ、質問を浴びせかけた。彼は、私が旅行を楽しんだかどうか、私の見たものは私が想像していたものと關係があつたか、私が Buryatia を氣に入つたかどうかといふことなどを尋ねた。彼の眞心こもつた話の途中で、私はソヴィエト佛教徒の長老に佛教寺院とソヴィエト政府との關係を話してくれるように頼んだ。ここに彼の言葉を記す。

「私達の國には非常に數多くの宗教や異なつた宗派があり、それらはすべて國家の下で各宗教間の平等の權利を楽しんでいる。ソヴィエト政府は市民の良心の自由を承認している。この權利はソヴィエト連邦共和國憲法に明記されており、すべての權威によって維持されている。」

次に我々との關係について言えば、私は國家と寺院の間は完全にうまくいっていると思う。我々は人民の幸福

と繁榮をその目的とするソヴィエトの統治方法を深く尊敬し、支持している。またそれが常に成功することを望んでいる。ここにソ連において宗教の自由が厳しく維持され、尊重されていることを示す事實をあげてみましょう。國家權力機關への選舉は、ソヴィエト連邦で、ある決まつた日に行われている。dazan の僧侶は他のすべての人民と同じく投票し、選舉に参加する權利を持っている。最近新しい高速道路が我々の dzan へのびた。ソヴィエト政府は、歴史的遺跡である Gusinozersk 佛教寺院に修理のための金を拂つてくれている。我々の要求によって僧院には電氣も取付けられた。我々は度々僧院まで燃料を運ぶためのトラックを政府機關に依頼するが、かつて一度も斷られたことはない。これらの例から考えて、我々と政府との間の眞實の姿がおわかりでしょう。」

私は大衆の尊敬を集めている Bandido-Khamb Lama に、ソ連において佛教團體はどのようにして支援されているのか、またその組織についても話してくれるように頼んだ。彼は次のことを私に話してくれた。

「我々は信者の寄進によって生活しており、一度も金に困ったことはない。我々の機關組織についていえば、それは民主主義原理に基づいて構成されているものであるといえよう。ソヴィエト連邦のすべての佛教徒を統率するソ連の佛教宗務委員は、僧職者と信者との總會で選出される。その委員會は佛教徒の宗教的生活を指圖する。すべての佛教寺院、僧院、集會所、そしてその他の利益はその委員會の統轄下にある。

各々の僧院の最高諮問機關として長老と信者の評議會があり、これらもまた總會で選舉される。」

私は次にソヴィエトの佛教徒によって指定されている宗教の休日に関して質問すると、Gomboyev はこう答えた。

「ソヴィエト連邦に住んでいる佛教徒には、Khurals と呼ばれる六つの重要な祭典が莊嚴に指定されている。それらのうちの五つは佛陀を記念して獻げられるものであり、他の一つは有名な佛教徒の先驅者 Tsongkhapa に獻げられるものである。彼の名のもとに、現在ソ連の佛教徒の大部分が住んでいる領域に佛教が普及したのである。

ある。

我々の最も莊嚴な休日は、Zagan-Sara または「白い月の休日」と呼ばれているものである。佛教徒の曆によればこれは新年の始まりにあたる。Zagan-Sara は大乘系佛教徒の太陰曆の最初の春の月である。その休日は偉大なる佛陀を記念して獻げられる。Zagan-Sara の休日の間すべての信者は罪を清め、來る年のために幸あれと願うのである。

Buryat, Kalmyk, Tuvinia の信者、そしてその他の佛教を信仰している人達は、休日のずっと前から祭典の準備にとりかかる。彼らは住居を敷物や刺繡や花で飾り、道路にもまた祭のための準備をし、新しい着物を作る。

Zagan-Sara の休日は十五日間続く。「白い月」の第一日目には、信者達が寺院や僧院に集まり始める。休日は Sidar という莊嚴な儀式に始まり、それには僧院の院長をはじめすべての僧職者、信者が参加する。Sidar が終わった後でラマと教區の全信者は寺院の長老 'Shiret-u' にお祝いの言葉を述べ、彼に Khadakas (豪華な装

飾を施した特別仕立ての帯)の贈物をわたす。この贈物をわたすことは即ち新年の到來を意味する。

信者達の家の戸は Zagan-Sara の休日の間、ずっと開いたままになっており、客人は心からの歓迎の言葉で迎えられ、新年の幸福と繁榮を望み、祭の晩餐に招待される。

ラマと信者達は僧院と寺院で行われる毎日の儀式に参加する。頌詩と訓誡が次々と讀まれて宗教儀式が行われる。大きな寺院や僧院のない遠方の地域を順次訪れるのもまたラマの義務である。

私はここで Zhambal Dorzhi Gomboyev 自身について少し説明したいので、會見の記事を止どめる。彼はおよそ七〇歳であり、Buryat に生まれ、佛教の信仰に全生涯を獻げて來た人である。彼が十二歳の時、両親は彼を僧院へ入れた。二〇歳の時 *gebsha* の僧名を受與され、その後 Gomboyev の名を與えられた。長い間 Zhambal Dorzhi Gomboyev は Aginsk 佛教僧院の長老であった。彼は一九六三年、佛教會が彼をソ連の佛教徒中央宗務委員會の議長に選出した時、僧侶生活での

最高位に達した。現在では彼は Ivölga 佛教僧院に住み、一般の僧と一緒に喜びも悲しみも共に暮している。

北部佛教の歴史と哲學に關する造詣の深い學者である Zhambal Dorzhi Gomboyev は、ソヴィエト佛教徒の間で威光を放っている。彼はアジアの佛教國においてもその名を知られ、尊敬されており、また世界平和會議の一員でもある。その高齢にもかかわらず Zhambal Dorzhi Gomboyev は、東南アジアの同志の信者を訪れるため長い道程を快く出かけて行く。何故なら彼は自分がそうすることが、戦争のない地上の平和と、欲に溺れた心や恨みのない、すべての人々の間の友情を説いた佛陀の偉大な説法に相應すると深く信じているからである。佛教徒世界會議に参加して、Gomboyev はネパール、カンボジア、ビルマ、セイロン、日本、インド、モンゴル、その他の諸國の佛教團の指導者達と會見した。私が Ivölga 佛教僧院の印象について述べたいことはこれですべてである。しかしながら私は佛教の他の中心地を訪れる機會があった。

——Chita 地方の Aginsk 民族管區にある Aginsk d-

azan である。この佛教寺院は、Aginsk ステップに住む八つの Buryat 部族からの寄進の金で、ロシアの建築家によって一八一〇年に建立された。それは現在でもなお堅牢である。そこは長い間、出版・製本の中心地として有名であった。僧院の中庭では、木彫職人が特別の板の上に原文を彫り、その上にインキを塗り印刷物を作っていた。チベット語—モンゴル語辭典、チベット譯の佛教文學と哲學の記録が、Buryat の佛教研究者の獨創的著述と同じく、ここでは非常に古い方法を用いて印刷されていた。現代の印刷術の發達に伴い、この僧院は以前の名聲を失った。

Aginsk 佛教僧院は、立派な二階建てで白壁のチベット風建物である。一階には儀式の行われる大廣間があり、そこは無数の佛像や Sansaren-Khurdes 像や、佛陀とその弟子の生涯からとった種々の挿話の繪で飾られている。そしてまた Maidari, Tsongkhapa, Manjusru (白い冷たい人) などの他の神々の像も飾ってある偉大なる佛陀の德を稱えた suburgan は信者に深く信仰されている。そして十方世界を照らす神鏡もここに保

存されている。

二階は、Tsongkhapa, Vasubandhu, Dharmakirti その他の諸師の注釋や著述やそして多數の佛教典を収蔵する圖書室に占領されている。そこには、チベット、インド、セイロン、ネパール、中國、その他アジアの諸佛教國の佛教徒の生活を書いた本もある。それらは主に東南アジアの同志信者から贈られたものである。寺院の前には傳統を受け繼ぐ香爐と、小さな suburgan がある。dazan にはこの他、たくさん suburgan と佛塔がある。

Aginsk 僧院においては、萬事が僧職者と信者の代表者からなる評議會によって運営されている。その委員は信者とラマの總會の時に選舉される。その議長は Buryat の農民の息子 Golsan Zhimba Gonchikov である。彼は一八九九年 Zabaikalsk に生れた。九歳の時彼はチベットの學校に入學し、そこで佛教を勉強した。近年 Golsan Zhimba は佛教の信仰に獻身的に仕え、僧院に引き籠った。一九六三年に Aginsk dazan の長老 Gomboyev が佛教徒中央宗務委員會の議長に選ばれ、

Ivolga 僧院に移住した。その後を Gonchikov が繼いだのである。

この僧院で注目すべきものの一つは木である。その木は聖なる菩提の木の種から實を結び、インドの佛教徒のいうところによれば僧院を象徴するものである。僧侶も信者もその木を敬って取り扱い、非常に大切にしている。Buryatia の佛教遺跡のうちには、現在修復されている Gusinozersky 佛教僧院もある。

佛教研究の歩み

數世紀にわたる古代佛教文化遺産は、世界中の東洋學者達に長い間注目を浴びてきた。ヨーロッパ、アジア、そしてアメリカの多勢の學者が、佛教國の文學、哲學、歴史、そして藝術の研究のために自分らの生涯を獻げた。ロシアにおいては、佛教に對する注目が西洋においてよりもいち早く起った。何故ならロシア南部と東部國境地域に住む人民が、この宗教を信仰していたからである。私はこの佛教に關する注目が、一體いつ始まったか

は正確にはいえないが、一七一六年に Peter 大王が中國とチベットの佛教を研究するために、僧侶使節を北京へ派遣したことはよく知られている。その使節團の一人は、初めてロシア語で佛陀の生涯を著した。ロシアの歴史家として有名な G. Miller もまた、佛教を研究した。佛教宇宙論、彫像研究、佛教僧院内の生活、そしてシッダルタ王子、ゴータマブツダの傳記が、ロシア學士院によつて書かれた。その他多勢のロシアの科學者が佛教に興味を示した。

ロシアにおける佛教研究の土臺は、ロシアの東洋研究に關して意欲的で最も有名な學者の一人である學士院 Vassily Vassiliyev によつて成された。

書記の息子の Vassiliyev は、一八一八年二月二〇日、Nizhni Novgorod に生れた。一六歳の時 Kazan 大學の哲學部東洋學科に入學し、そこでモンゴル語を勉強した。Vassiliyev は、モンゴルに關しては有名な専門家である O. Kavalevsky に師事した。Kavalevsky の助言によつて Vassiliyev は當時まったく未調査であつた東洋思想、特に佛教の問題を取り上げた。Vassiliyev

はモンゴルの源を研究し始め、やがて一九歳の時、修士課程として「佛教徒の精神」(Altan Gerela の業績)と題する論文を出すことができた。

佛教のより深い知識を得るため、Vassilyev はモンゴルに行き、一八四〇年北京への僧侶使節の一員としてそこで一〇年過した。中國で彼はチベット語、中國語、そして梵語を修得した。

疲れを知らぬ研究者 Vassilyev は、インド、チベット、中國で佛教に關する多くの貴重な資料を収集した。

彼は、哲學や歴史に關する中國、チベットの多くの書物の抄録だけでなく、中國の佛教聖典の頌詩を全部翻譯したものの、抄本や評論をロシアに持ち歸った。Kazan へ歸りやいなや Vassilyev は、中國語と滿洲語の權威となり教授になった。しかしながら彼はそこには永く滯らずに、一八五五年に St. Petersburg へ引越した。ここで彼は、生涯中で最も充實した時期を送った。彼は「佛教哲學の基礎について」という博士論文を發表し、ロシア科學士院の準會員に選ばれ、そして死ぬ直前には正會員に選ばれた。彼の「佛教、その教義、歴史、そして

文學に關する」驚異的な著作は、一八七八年に發行されて、佛教研究にとって重要な資料を提供した。

Vassilyev の現存の著作の中最も大部なものは、佛教術語辭典の Makhaviutpati の注釋で、それには Makhaviutpati に出てくる九五六五の佛教用語の詳しい説明がなされている。また「佛教文獻の諸學派の概観」、「チベット佛教の歴史」、「そして「Taranatha 著述のインド佛教の歴史のロシア語譯」の原稿も現存する。

Vassilyev の著作は佛教研究にとって、非常に大きな重要性をもっていた。「佛教の一般的概説」は彼の佛教觀を簡潔に述べたものであり、大膽な假説と原典解釋による新しい思想を含んでいる。フランスの科學者 E. Burnouf の基礎的業績とともに、それはヨーロッパにおける佛教の科學的研究の基礎となった。

Vassilyev は一九〇〇年四月二十七日、St. Petersburg で八二歳の生涯を終えた。

彼の名聲は、彼が偉大な業績を残したロシアの東洋研究の發展とともに永久に忘れられないであろう。

政治評論家、旅行家として天賦の才ある有名なロシアの東洋學者 Ivan Minayev は、Vassiliyev の弟子であり、師が始めた研究を續けた。Minayev は、當時 Vassiliyev が教授をしていた St. Petersburg 大學の東洋語學科に學び、若き Minayev が佛教の教理や哲學に大きな興味を持つようになったのは、彼の師の影響であつた。

しかしながら、Minayev は自らの道を開いた。彼以前のロシアの科學者は北傳の佛教に關する研究はしてゐたけれども、南傳の佛教はあまり注目しなかつた。Ivan Minayev はおそらく、南傳佛教研究と名づけられてゐるロシアの佛教徒研究における新しい研究法を創始した最初のロシア學者であつたろう。彼はプラークリットや現代インド語は勿論のこと、南傳佛教の古代文學遺文の書かれてゐるサンスクリットやパーリの研究に多くの時間と勞力を注ぎ込んだ。

一八六二年、大學を卒業後、Ivan Minayev は西ヨーロッパの佛教研究者の著作を研究するために、海外へ出た。彼は五年間、英國博物館、ベルリン大學、そし

てパリ國立圖書館で、パーリ語の資料を研究しながら働いた。彼は、後年同輩の學者達を驚かせた博學の基礎をそこで身につけたのであつた。

一八六七年歸郷後、彼は佛教徒聖典譯本、「Pratimoksha Sutra」と題した第一作を發表した。この多才な研究者によつてなされた佛教古代遺物の研究は、ロシアの佛教研究にとつてまったくすばらしいものであつた。

歴史、言語、そしてインドの民族傳説に興味を持った彼は、あらゆる宗教において、傳説が重要な役割りを果たすものであると考へた。何故なら、宗教は傳説を通してその哲學教理大系が身近なものとなつてくるからである。佛教徒聖典にもまた、傳説や、寺院を飾る挿畫がたくさんある。Ivan Minayev はそれらを注意深く研究することによつて、佛教の複雑な哲學的教理をより深く理解するに至つた。

しかしこの傳説の研究は、Minayev の最大の問題ではなかつた。彼の創造的研究は、殆んど全面的に佛教の歴史とその哲學に費された。「佛教、その研究と資料」は非常に多くのサンスクリットとパーリ原典に基づくも

のであり Minayev の中心作である。この著作で、彼は讀者に、「佛教の發展における一般的概論」を與えることを意圖したと言った。Ivan Minayev のような偉大な人のみが、このような複雑な問題に取り組むことが出來たのである。その著作は、東洋研究の寶庫にとつて輝かしい發展であり、現在もなお貴重性を失つてはいない。一八七六年、彼はアジアへ最初の旅行を計畫し、セイロンで佛教徒の聖地と佛教美術の遺跡を訪れた。彼はまたインドの聖なる遺跡とネパールの佛教に精通するようになった。一八七九年にはインドへ二回目の旅行を行い、そして一八八五年にはアジアへ三回目の旅行を行った。Minayev の旅行記（それらは一九五五年、ソヴェエト連邦で再版された）は、非常に興味深いものである。

旅行中、Ivan Minayev は佛教文化と美術の逸品を収集し、それらは現在、大切にソ連科學アカデミーの人類學民族學博物館、およびレニングラド州立圖書館の資料室に保存されている。

Ivan Minayev は若くして死んだため（四九才）、よ

り注目すべき著作や計畫は打ち切られたけれども、彼は

一三〇以上の著作を残した。「佛教の資料と記録」と題する収集は、彼の死後に、弟子 Sergei Oldenburg によつて出版されたが、Ivan Minayev の佛教研究にとつて最大の業績は、彼が初めて、ロシアと西洋の學者を佛教の哲學大系に注目させたということであつた。

世界中の東洋學者にその名を知られている Sergei Oldenburg（一八六三—一九三四）は、彼の師 Ivan Minayev と同じく、佛教民族文學と美術の歴史研究にその生涯を獻げたもう一人の偉大なロシア人のソヴェエト學者である。

一八八一年、中等學校を優等で卒業した Oldenburg は St. Petersburg 大學の東洋學部に入學し、そこで Vassily Vassilyev や Ivan Minayev のような有名な學者のもとで、ペルシア語とサンスクリット語を勉強する幸運に恵まれた。

彼は、「プラークリット方言 Magadhi の音聲學と言形論の概説」と題する論文を提出し、大學を卒業した後も佛教の原典研究を續けた。一八九四年に彼は、佛教傳説「Bhadrakalpavadana, Jatakamala」を取り扱った

論文で修士課程を得た。

Sergei Oldenburg は、インドの民間傳承に關する豊富な知識によつて、有名な Bharhut の塔とジャワの Borobodura の遺跡に書かれた繪畫の意味を解明することが出來た。彼はまた、原始インド民俗詩についても研究し、「佛教文學における Mahabharata の問題について」と題する著作は、非常に興味深く重要なものである。中央アジアの土の中で發見された様々の言語で書かれた古代資料の抄録の解讀と注釋に關する彼の著作もまた、極めて貴重なものである。この分野における彼の主な業績は、カロシュティで書かれた寫本、および「Dhammapada」の最も古代のプラークリットの翻譯を含む寫本の分析である。

一八九七年、Oldenburg は「Biblioteka Buddhika」というシリーズ集を出版し始め、その中で、北傳と南傳佛教の哲學、あるいは宗教に關する多數の書物を出版した。ロシア人のみならず、アカデミー會員 Oldenburg に率いられた世界中の有名な佛教研究者が、この仕事を手傳った。現在までに、このシリーズの三〇卷以上が出

版されている。

この東洋研究の業績によつて、彼は英國アジア學會とフランスアジア學會の名譽會員に選ばれた。彼はまた、ハイデルベルクの佛教文學研究會の名譽會長にも選ばれ、ベルリンとゴッテンゲンのアカデミー會員やインド考古學學會の名譽會員とも文通していた。さらにアカデミー會員 Sergei Oldenburg は、晩年にはソ連科學アカデミー東洋研究所の所長を務めた。

北カザフスタンの Borovoye 居留地からあまり遠くない、松の木立の近くにある上品な笠石の墓に次の碑文が記してあった。「彼は、インドの古代思想家達の英知を祖國に説いた。」その墓の下には、インドと東南アジアの佛教研究に生涯を獻げた Fyodor Shcherbatskoi が眠っている。

將校の息子 Fyodor Ippolitovich Shcherbatskoi は、一八六六年九月一六日、とある小さなロシアの村に生れた。Tsarskoye Selo の中等學校を終えた後、彼は St. Petersburg 大學の歴史哲學部に入學し、そこで Ivan Minayev の言語學とサンスクリット語の講義に出

席した。Minayev がインドとビルマに旅行中、Shcherbatskoi は Sergei Oldenburg のもとで勉強し、この二人の大學者に影響されて、彼は一生を佛教哲學の研究に獻げること決心した。何故なら彼は、その研究にインド文化の最大の偉業の本質が潜んでいると考えたからである。

一九一〇年、彼はさらに佛教を研究するためインドへ渡った。彼はこの旅行中、ボンベイ、カルカッタ、ベナレス、その他を訪れ非常に興味を深め、いつも深い感銘をもってそれを回想した。彼の關心とするものは、主に佛教と古代インド資料の研究であつた。彼はベレナスで、高い教養あるインドの學者について研究しながら數ヶ月を過した。

Shcherbatskoi の佛教とインド論理學に關する最初の小論文は、すぐさま注目を引いた。その中で彼は、ある東洋學者の、インド哲學はギリシア哲學をその基盤とするという主張に反對し、インド哲學と論理學はインドの地で排他的に發展したものであり、インド人の精神の獨立的業績の結果であるということを證明しようとした。

一年後に Shcherbatskoi は、「後期の佛教教理による認識と論理の理論」の最初の部分を出版した。佛教論理學の歴史と理論の系統的根據を書いた二番目の部分は、一九〇九年に出版された。この Shcherbatskoi の後期佛教の論理學に關する最初の著述は、世界に認められてドイツ語とフランス語に翻譯された。

アカデミー會員 Shcherbatskoi の佛教哲學の古典となつてゐる主な著作は、一〇月革命の後に書かれたものである。その中には、「佛教の中心概念と "Dharma" の意味」(一九二四)、「佛教の涅槃の概念」(Nagardjuna 著述の「相關性の理論」の第一章から二五章までの翻譯、そして Chandrakirti の注釋の翻譯などがある。

しかし Fyodor Shcherbatskoi の著作の中、最も重要で基本的なものは、一九三〇年と一九三二年に出版された「佛教論理學」二卷である。佛教學者達は、非常に多くの資料を用い、またそれを巧みに處理しているこの本を賞讃した。それには約五〇冊のサンスクリット語とチベット語の原典が引用されている。この莫大な貴重資料と、西ヨーロッパ、インド、日本、そしてロシアの學

者達の研究發展に基づいて、Shcherbatskoi は、佛教論理學は「インド哲學の長期發展の最高峯」のものであり、またそれはギリシア論理學から獨立した、完全に獨創的なものであることを證明した。有名なインドの學者 D. N. Shastri は「佛教論理學」を評して、それは Dignāga の哲學派の秘められた實を見せるのみならず、Udayakara, Vachaspathi, Dayanta, Dayana その他の論者の原典の批評注釋をも含んだ驚くべき書物であると述べた。他の學者誰一人として、Shcherbatskoi 程、佛教哲學を深く理解することは出来なかった。Shastri 博士もまた、インド人は Fyodor Shcherbatskoi の記念碑を作り、インド哲學思想の發展に貴重な貢獻をした人物を生み出した彼の國家に對して、絶大なる謝意を表すと述べた。Jawaharlal Nehru はその著「インド發見」で、Shcherbatskoi をインド哲學の世界的權威者と呼んでいる。

Shcherbatskoi は生涯を佛教哲學の研究に送ったが、一方また歴史や文學にも興味を持っていた。彼はサンスクリット語から、「一〇人の王子の冒險」、「Pancha-

ntantra」、その他を翻譯した。五年間（一九三二—三四と一九三八）彼は「Arthashastra」のロシア語譯に携わっていた若いソヴィエトの研究者の指導にあたつた。

彼の著作にはすべて、東洋民族とその傳統ある文化に對する慈愛が浸透している。彼は佛教研究のためにすべてを獻げ、またそれに人生の目的を見い出した。

Shcherbatskoi はまた、すぐれた師でもあった。彼は、彼が始めた古代東洋哲學の研究を續けているだけではなく、現在世界中で、佛教研究の指導權を握っている學派を創設した多數の才能ある東洋學者を指導した。

その秀でた業績を認められて Fyodor Shcherbatskoi は、ロンドンアジア學會、ベルリン東洋學會、パリアジア學會など諸外國の東洋學會の名譽學員に選ばれた。そしてまた、ゴッチンゲンのアカデミー會員にも認められた。現代の佛教歴史書は、決して彼の名前と業績を見落すことは出来ない。彼は一九四四年に死んだ。

もし我々が、世界で最も優秀な佛教學者の一人である Yuri Roerich に注目しなかったら、私のこの概説は完

全なものとはいえないであろう。

Yuri Roerich はロシアで英才教育を受け、ロンドン、パリ、そしてアメリカでその博學を完成した。彼は多年の間、モンゴル、中國、チベット、セイロン、ネパール、ビルマ、そしてインドを旅行し、佛教聖地を訪れた。彼のおびただしい著作の業績と學術的價值は、彼の博識と深い個人的印象を除いては考えられない。

東洋の六ヶ國語とヨーロッパの四ヶ國語を修得し、佛教の歴史、哲學、論理學、倫理學、文學、美術に關する百科辭典的知識をもつて、Roerich 教授は學生を佛教の興味に目覺めさせることが出來た。彼の指導下にいた學生達は、彼の提案により、佛教のセイロン及び東南アジア諸國への浸透、タミール遺跡の南インド佛教、Nagardjuna 哲學の辨證法、そして Aryashura の創造的詩頌を研究した。彼はまた、Dhammapada のパーリ語からロシア語への翻譯をソヴィエト連邦で出版するのを責任編集した。

一九六〇年の Roerich の突然の死は、まったく大きな損失であつた。彼の名譽を讃えて名づけられた學術研

究室がアジア諸民族研究所につくられている。彼の藏書はそこへ移され、多勢の弟子は彼が始めた研究を續けている。

我々の國のいくつかの研究所もまた、佛教研究において輝かしい業績を残している。例えばレニングラドにおけるソ連科學アカデミーのアジア諸民族研究所の寫本部門や、Ulan Ude の Buryat 總合學術研究所である。

Buryat の學者達は、佛教の宗教的または哲學的文獻を研究している。この研究所の寫本部門は、世界で最も豊富な収集を藏する。——チベット語、モンゴル語、そして Buryat 語で書かれた佛教原典の約三萬部の寫本と木版である。

その収集には、モンゴルやチベットの佛教徒の書いた書物や哲學書もある。現在、Buryat 研究所はその寫本の目錄を作製中であり、それらの多くはサンسكريット語からの翻譯である。モンゴル語で書かれた佛教經典 Gandjur と Dandjur の二二五卷は、その注釋書と一緒にここに保存されている。これらの書物は、すべての

インド佛教學者のはたした學問のあらゆる分野における業績であることは言うまでもない。Danjur は美しく彩飾された原典で、Nagarjuna, Vasubandh, Dignaga, Kalidasa その他の著作を含んでいる。

歴史學修士 Georgi Rumyantsev は、その寫本部門の主任である。哲學修士であり、チベット語でソヴィエト學者達をリードしている Badia Dandaron もここで働いている。Boris Semichev と協力して彼は最近、チベット語—ロシア語辭典を出版し、それによって、チベット語で書かれた佛敎原典の未だ知られざる多くのことが研究出来るようになった。Boris Semichev は、チベット語の他にサンスクリット語とパーリ語にも學識高く、「Arthashastra」をロシア語に翻譯した。

ここにはまた、多勢の若い研究者が屬しており、佛敎原典に見られる様々の言説、敎訓、傳説、叙事詩をサンスクリット語から Buryat 語に譯して研究している。私はその研究所を訪れた時、Buryat の學者 Ochirov によつてチベット語から翻譯されて、今世紀の始めに出版された「Dhammapada」の原稿を見た。そこにはま

た、「Panchatantra」の説話の翻譯寫本があり、そのいくつかは Aryashura の「Gorand of Tales」や、Nagarjuna の「Drops of Rashiyana」からなっている。それらのすべては立派な Buryat 語で書かれており、學者達はその翻譯がすばらしいものであると認めている。

Ulan Ude の東洋學者は佛敎哲學と歴史を研究しており、現代佛敎についても興味を示している。その研究所の人には、地方の資料に基づいて、現代佛敎に關する資料の収集にとりかかっていた。現在では、Buryat の學者達によつて、中央アジアにおける佛敎の流傳と佛敎哲學論の研究が出版されようとしている。

モンゴルの資料は非常に興味あるもので、その中には、インドの東洋學者 Tarnatha の著作をモンゴル語に翻譯したものもある。これは、彼の母親を地獄への旅から救うことを描いた隨筆の權威ある翻譯である。その研究所には、Kalidasa の詩「Cloud Messenger」のモンゴル譯もある。

ごく最近、「Source of the Sages」と題する佛敎

術語辭典が、R. Pubayev と B. Dandaron の翻譯で出版された。それは、一八世紀の中頃、四〇人の教養あるラマの會によつて、チベット語の Danjur をモンゴル語に翻譯した見解に従つて編集せられたものであつた。この古典的辭典は、過去においては非常に有名なものであり、貴重な參考本として役に立つた。「Source of the Sages」は、長い間世界中の注目を集め、その出版は、佛教研究にとつて偉大な業績であつた。

レニングラドの東洋學者達は、ある重要な佛教研究に取組んでいる、彼らの中で第一人者は、Boris Pankratov 教授であり、彼は中國語、チベット語、モンゴル語、その他の各國語に關する完璧な知識をもつて、諸佛教國にとつて缺くべからざる専門家となつた。その他の専門家としては、ヒンズー學者の Eduard Tenkin, Mariya Vorobyeva-Desyatovskaya として Leonid Menshikov がいる。レニングラドの研究者達は、一八世紀に収集されて現在レニングラドのソ連科學アカデミーのアジア諸民族研究所の寫本部門に保存されている佛教原典と、唯一の木版の研究に、主に全力をあげて

いる。いわゆる Dunhuan コレクションと呼ばれているものは、Sergei Oldenburg やその他のロシア學者、または旅行家によつてロシアへ持つて來られたものであり、その最も古いものは一一世紀初期のものもあつて、中國佛教原典の非常に貴重な収集である。それらはほとんど、サンスクリットから譯された部分と中國原典の二つの部分に分けられるであらう。その翻譯の中、失われてしまつたと思われていたものも發見された。

佛教はモスクワにおいては、Sanzhe Dilykov, Otkyabrina Volkova, Grigori Bongard-Levin, Yelena-Semeka, Alexei Kochetov およびモスクワ教育研究所の教授やその他の人々によつて、ソ連科學アカデミーのアジア諸民族研究所で研究されている。

近年のソヴィエトの佛教研究所は、その先輩の傳統を立派に受け繼いでいる。最近では、Nauka (科學)出版所が、Viktor Toporov によつて翻譯された古代佛教原典「Dhammapada」のロシア語譯、そして前アカデミー會員 Alexei Barannikov と Otkyabrina Volkova によつて Aryashura の「Dhatkamala」の共同譯、そ

らに Alexander Vostrikov の「キベット文献の歴史」を出版した。Brigori Bongard-Levin と Oktyabrina-Volkova は、北傳佛教の最も有名な文學作品の一つである「Ashok-Avadanamala」から「Kunal」の傳説」を出版した。また歴史學修士 Yelena Semeka によつて、Singhalese 碑銘研究に基づく、セイロンの古代佛教僧院の經營形態に關する興味ある著作が出版された。

Alexei Kochetov によつて、「佛教」と題して出版された比較的最近の本は、現在行われている現代佛教の一部を取り上げ、版を重ねて、専門家と一般讀者に大いに興味を喚びおこしている。

Jawakarlal Nehru, Sarvapalli Radhakrishnam, S. Chatterjee, D. Dutt, M. Roy, M. Singh, A. Banerjee や、その他インドの著者によつて書かれた歴史、あるいは哲學に關する書物は、一般民衆を佛教に親しませる重要な役割を果している。

S. Tolstoy, A. Yakubovsky, A. Bernshtam, M. Gryaznov, A. Belenitsky のようなソヴィエトの有名な考古學者達の著作や、その他 Khoresm, Pyandzh-

ent, Chui 谷、そして Termez のガンダーラ後期様式の佛教遺跡を發見した人々は、世界的な名聲を得た。

要約すれば、ロシアとソヴィエトの佛教哲學研究における業績は、世界の他國のそれと肩を並べていると言えよう。ソヴィエトの學者は、豊富な佛教文化遺産を細心の注意をはらつて取り扱っている。佛典の翻譯と註釋は、東洋諸國の特殊な歴史と文化を掘り起すのに役に立っている。

(以上)